●〈症例〉

放射線, Nd-YAG laser, 化学療法により quality control の得られた
高齢者直腸癌の 1 例小関啓太¹⁾ 八重樫寛治 今城真人 西村久嗣
星野直明 三島 好雄²⁾¹⁾草加市立病院外科, ²⁾東京医科歯科大学医学部第 2 外科
[Key Words] Nd-YAG laser, 直腸癌

はじめに

高齢者の直腸癌に対し, Tegafur 投与, 放射線照射, Nd-YAG laser 照射の併用により, 良好な治療効果を得られた 1 例を報告する。

症例: 84 歳女性。

平成 4 年 10 月, 排便異常を主訴に来院し, 直腸に約 2/3 周性の 2 型腫瘍を認め入院した。入院時検査成績では Hb 10.2g/dl, Ht 31.2% と軽度の貧血を認め, 便潜血反応は陽性で, 腫瘍マーカーでは CEA 22ng/ml, CA19-9 280U/

ml と高値を示した。

大腸内視鏡所見: 直腸 Rb に約 2/3 周性の 2 型の腫瘍を認め (Color 1A), 易出血性であった。生検による組織診断は, 高～中分化型腺癌であった (Fig. 1A)。

下部消化管 X 線検査: 直腸 Rb に辺縁不整な陰影欠損像を認めた (Fig. 2A)。

臨床経過 (Fig. 3): loop sigmoidostomy にて腫瘍を空置した後, Nd-YAG レーザー照射, 放射線照射, 化学療法を併用した集学的治療を施行する方針とした。入院日より Tegafur 坐薬 750mg 投与を開始し, 人工肛門造設術後, Telecobalt 対向 2 門の放射線照射を計 50.4Gy 施行した。照射終了後の内視鏡所見では, 周堤の平坦化がみられ (Color 1B), 組織学的所見による効果判定では, 大星・下里分類で Grade III 相当であった。

引き続き, メディレーザ YAG50, MEL50Y による Nd-YAG レーザー照射を 3 回, 計 4500 J 施行した。内視鏡的变化 (Color 2) としては, 2 回照射後 (Color 2B) には腫瘍がほぼ平坦化し, 生検にても肉芽組織を認めるのみとなった。レーザー照射 3 回目終了後

Fig. 1 A: Biopsied specimen showing well or moderately differentiated adenocarcinoma. B: Biopsied specimen after treatment showing disappearance of the cancer cells.

Fig. 2 A: Barium enema study showing advanced rectal cancer before treatment. B: Irregular surface was disappeared after treatment.

Fig. 3 Clinical course.

Fig. 4 Endoscopic ultrasonography demonstrating the obscuring of the layer structure beyond the proper muscle.

(Color 2D)には、瘢痕を認めるのみで、腫瘍の残存を認めず、生検による組織所見でも、炎症性細胞浸潤を伴う肉芽組織、線維性結合組織を認める以外、癌細胞の遺残は認めなかった(Fig. 1B)。

治療後の下部消化管 X 線検査では、腫瘍による陰影欠損の消失、管腔の伸展性の回復がみられた(Fig. 2B)。治療後の超音波内視鏡像では、筋層外縁がやや不整で、筋層および外膜層の肥厚が認められ、腫瘍の残存あるいは線維化が疑われた(Fig. 4)。

考 察

本症例では、治療前では2/3周性の径4.8cmの腫瘍が、Tegafur投与および腫瘍やその周囲や所属リンパ節に対する50.4Gyの放射線照射によって約1/2に縮小した。さらにNd-YAGレーザーを照射し、内視鏡的な消失を認めた。以後9カ月の経過観察では、再発の徴候は認めていない。

放射線照射後に、姑息的治療法としてのNd-YAGレーザー照射や抗癌剤投与などを組み合わせることにより、有効な治療効果が期待される。この他に、局所免疫療法として、OK-432とfibrinogenの少量1回投与が有効²⁾との報告もあり、治療法の組み合わせによ

り、さらに相乗効果が期待される。

大腸の進行癌に対してのNd-YAGレーザー照射による治療効果の報告^{1,3)}によると、腫瘍の消失を認め、組織学的検索にて癌細胞を認めない症例を著効例とした場合、著効例の該当例は27例中4例であり、高率とはいえず、切除可能症例に安易に施行すべきではなく、適応症例の検討は厳重にすべきである。

文 献

- 1) 小野成夫, 加藤敏次, 田中豊治: 切除不能消化器癌による管腔狭窄に対する経内視鏡的Nd-YAGレーザー照射の有用性について, 日外会誌, 90: 1598~1601, 1989
- 2) 門田卓士, 森元秀起, 室谷昌弘, 他: OK-432とfibrinogenの混合投与による大腸癌局所免疫療法の検討, 日外会誌, 92: 31~36, 1991
- 3) 高橋 俊, 大谷剛正, 工藤 康, 他: 切除不能・再発直腸癌に対するNd-YAGレーザー照射治療の試み, 消化器外科, 6: 1495~1500, 1983

A Case of Rectal Cancer who Underwent Nd-YAG Laser Therapy, Irradiation, and Chemotherapy for Control of the Quality of Life

Keita Koseki¹⁾ Kanji Yaegashi
Mahito Imajo Hisatsugu Nishimura
Naoaki Hoshino Yoshio Mishima²⁾

A 84-year-old female with the chief complaint of dyschezia was admitted to our hospital for treatment of advanced rectal cancer. She underwent a sigmoid-colostomy and dispensed Tegafur 750mg i. r. and irradiated for total 50.4Gy. And then Nd-YAG laser therapy, 3 times, for total 4500J was performed. Endoscopically, only scar was recognized and tumor was disappeared. Biopsy revealed only granulation and cancer cells could not be detected.

We reported a case which suggested that combined palliative treatments such as irradiation, Nd-YAG laser therapy, and chemotherapy were effective and advantageous for the quality of life.

¹⁾Dept of Surgery, Souka Municipal Hospital. ²⁾2nd Dept of Surgery, Tokyo Medical and Dental University, School of Medicine.

<カラーは24pに掲載>